

# 南風

南照寺 寺報 第三号 平成二十五年 夏

向夏の候、いよいよ梅雨が本格化してきそうです。先日、六月一五日の土曜日、南照寺本堂に於いて正信偈のお勤めが厳修されました。折悪しくも午後からの雨で、来ていただいた方々には深甚の謝意を表します。

今回は、開始前にすこし正信偈の載っている勤行本の読み方を説明いたしました。間違う気遣いがなくなくて、自信を持っていただけなのか、良く声が通って、非常にいいお勤めになったのではないかと思います。その後は、雑談というか、様々に意見の交換をいたしました。私にとっては非常に貴重な時間です。いくつか紹介いたします。

まず、私からの報告で、この前の南風第一号に書きましたことでもありますが、関東や九州などの遠方の御門徒方以外の全部のお宅に、一応訪問させていただきました。という事です。やり方の是非はあるうかと思えますが、基本的に事前通告なしの電撃訪問という形を取りました。恐らくそれが、一番ストレスのないやり方だろうと考えたからです。御留守の場合は封筒に寺報を入れ、東本願寺出版の同朋新聞とともに郵便受けに入れておきました。たまたま御在宅で、非常に歓迎を受けた場合も、たまたま大変に不都合な時に現れたためでしょう、全くの困惑の表情で対応されたこともありました。勿論それは当然のことです。親しみを持っていたたくつもりが、かえって反感を買うということもあつたかもしれません。そうであつたとしても、今回はそれで良かったと僕は思っています。訪問したが故に、本人または家族の体調の問題などで、お寺に行けないような事情を抱えておられる方、高齢の方、いろんなお顔を目にする事ができました。たとえ玄関のチャイムを押しただけだったとしても、その場に行けたことで、まわりの様子からその生活と人となり、臆げにでも感じられるように思いました。名簿では決して得られない、大きな収穫であります。

次に、南風第二号に関わる問題ですが、これから南照寺に関わっていくこうとする人を増やしていく

には、今御縁を少なくとも持っていたいていただく方々それぞれが、その周辺（親戚、職場、御近所など）におられる人にそれとなくいろんな意味でアンテナを張っておくと良いのではないかと、というものです。なにか寺院に関することが必要になった時に、ご紹介とごころの生活と実は深くかかわっているはずのものではないのか、というようなお話をしたいからいいだろうな、と。また、そういう気持ちの伴った形でないとなかなか具体的に墓地購入や門徒が増えるということとは難しいのではないかと、という意見です。

さらに生活という点でいえば、今一家の筆頭に書かれている方々が徐々に高齢化していく中で、「意識」の引き継ぎ、リレーしていく、という作業についてから、その息子、孫世代の晩婚化に対する「出会い」の可能性としてのお寺の役割、ということまで様々に意見が出ました。「意識」というのは、例えば単に南照寺だけのことでなくて、かつて天王寺村と恵美須町周辺に生活の基盤があつて、それが自分自身のルーツであり、かけがえのない故郷である、とリアルに感じ得るような、そんな思いでしょう。「出会い」については、お寺の集いである「講」や神社の「祭」が結婚につながつたこと、お見合い結婚が普通だった頃、「釣書」がお寺に寄せられたこと、さらには月命日などで御門徒の家によく出入りするうち、深く各家庭内の事情に通じることになっていったということ、何よりその住職が、人格者として村の中で大きな信頼を勝ち得ていたということでしょう。最後のところは、結局私自身に重くのしかかるものであるわけですから。

\*\*\*

新たに選出された、責任役員並びに総代の発表も、紙面上上でしていただかないと、という至極もつともな御意見もありましたので、遅ればせながら披露させていただきます。

代表役員	住職	友澤秀三
責任役員	坊守	友澤育美

蒲生裕之助

総代

早崎大起

蒲生鐵男

山口敏雄

(敬称略)

大役を快く引き受けてくださり、誠にありがとうございます。ございます。今後ともよろしくお願いいたします。

\*\*\*

小さい頃、親や教師によく怒られました。落ち着きがなく、肝心なことを忘れたり、間違ったりして、きつく叱るのですが、矯正がうまくいかない、反省しない子供だったようです。やってはいけない、と言われたことは、「なんでやってはいけないのだろう」とやっしてしまうのです。それにしても小学校にはたくさん禁止事項があるものです。廊下を走ったり、つい隣の子と話をしたり、ぼうつと外を眺めていたり、買い食いをしたり、その度にお目玉を頂戴するわけですが、うるさいなあ、勝手にやらせてくれたらいいのに、そんな規則意味ないよ、と生意気なものでした。

昭和四十年代は、「自由」ということがあちこちで声高に唱えられる時代でした。学生運動や、自由恋愛、などという言葉も耳にしたように思います。しかし私の周りの大人たちは、現実にはみな非常に「不自由」なように見えて、窮屈そうでした。そして子供の私に、やっぱり窮屈なことを要求してきます。自由っていいなあ、自由に生きていきたいなあ、と考えるのも無理はありません。でもどうやったら自由になれるのでしょうか。そもそも「自由」って、どういうことなのでしょう。そのことを考え続けて、いつの間にか四十余年が経ってしまった、そんな感じでした。

やっぱり小学生より大人の方が、自由に何でもできそう。でも仕事ばかりで時間がなさそう、お金がないと切符も食料も買えない。夏休みも冬休みもある子供のままの方が、好きな時に友達を誘って遊びに行けるし、好きな本を読むことだってできる。じゃあ、お小遣いが今の何倍もあったら、行きたい所へ行って泊まりたいだけ泊まって、食べたいものを食べて……だれと?……まさかひとりぼっちで?

自分が思うままに生きる、というのであるならば、誰かと一緒に暮らしていくことはできません。だからといって、大きな権力や威力のようなものを身につけて、他人を意のままに操る、という方向の自由には全く魅力を感じませんでした。むしろさもない、あさましいことだと今でも考えています。(しかし「お金の力」というのは、まさしくこのタイプの自由を代表するものでしょう。)自分と他人とは、好みも意見も違うのですから、思いに純粹になればなるほど、共感してくれる相手は少なくなります。結局、自由に生きる、という選択をすると、一人で生きる、ということになるのかな、と思いました。では「一人で生きる」とはどういうことなのでしょう。

私が食べている料理を調理したのは、その食材を選んだのは、それを運んできたのは、それを育てたのは、私ではありませんでした。それぞれの専門の仕事に従事した、多くの人々によってなされたのです。衣服も家も、同様です。ではそれを全部自分一人で「自給自足」にまかなえば、自由が手に入るのでしょうか。

動物語をものにして、世界中を家族としての動物たちと旅して巡る、医学博士であり博物学者のドリトル先生の冒険譚が、当時の私の一番のお気に入り、十巻全部揃えて繰り返し読みました。理想の自由な大人のモデルが、彼でした。でも実は、もう一人憧れの大人がいました。彼の名は「ルパン三世」です。

\*\*\*

・次回の「お勤め」(正信偈、同朋奉讃式)の会は、

七月二十日(その次は八月十七日)の第三土曜日

午後二時より 南照寺本堂に於いて

です。ただ、八月はお盆にお墓参りに来られる方が多いので、その後すぐにまたそういう会を開くのも二度手間になってどうか、という懸念があります。いっそお盆の期間中の、一番来られる方の多そうな日に変更してやったほうがいいのでは、という合理的に考えもありましょう。次回の七月二十日の会の時に、広く御意見を伺えたら、と願っております。